

明治中期における青年の研修活動と佐渡学会連合会

佐渡伝統文化研究所 所長 石瀬佳弘

はじめに

明治23年(1890)11月23日に、雑太郡二宮村石田(現佐渡市石田)の石田会堂において第1回目の佐渡学会連合懇親会が開催された。呼びかけたのは二宮村の養気会で、発起者には養気会の石塚脩平・斉藤長三・石塚伊作・矢田求と平泉同志研究会の北条欽が名前を連ねている。同月7日、各学会に発送された照会状には、

「凡ソ事物ハ孤立シテ以テ最大無上ノ佳境
ニ自進スル事能ハザルハ自然ノ道理ニシ
テ、必ズヤ他物と相援扶シテ以テ漸々其
新ニ就カザルモノナシ。(後略)」

と、学会に限らず孤立しては十分な成果をあげ得ず、連合して協力し合う事によってこそ目的を完全に達成できるし、これこそ文明の文明たる進歩的方策ではなかろうかと問いかけている。そして、学術進歩のために「連合懇親会」を開催して今後の学術研究の上で必要な要件を協議したいので、

「貴会ニ於テモ同意ヲ表シ、左ノ各項ニヨ
リ会員ヲ参会セシメ、該会ノ目的ヲ完全
ニ満足セシメラレ度候」

と参加を呼びかけている。その各項とは、①日時は11月23日午前9時開会、②会場は二宮村大字石田元石田校、③会費は2円50銭、④出席会員は1会成るべく3名以上などとなっている。

この時照会状を送付した学会は、相川致力会・同耕学会・沢根同友(学)会・河原田行余青年学会・平泉同志研究会・金沢遷喬会・夷金蘭会・畑野青年会・多田一致会・羽茂青年会・小木致

力会・佐渡青年協会(新穂)の12学会である。

しかし、実際に参会したのは相川致力会(1)・沢根同友(学)会(3)・河原田行余青年学会(5)・金沢遷喬会(3)・平泉同志研究会(3)・夷金蘭会(2)・多田一致会(1)の7会18名で、外に今回の会主である二宮村の養気会(18名)を加えると8会36名の参加という、第1回としては盛大な会となった。この時期、佐渡の各地に成立した学会(学術研究団体)がそれぞれの地域で学術講演会や夜学会、図書巡覧所の設置、幻灯会などの活動を活発に行い、そこから育った青年たちが後に雑誌を発行したり農業の振興や史跡の保存整備などの大きな活動にとりくんでいった例も多い。泉公民館には、幸い明治23年から26年まで、第10回にわたる「佐渡学会連合懇親会記録」が保存されており、個々の学会についても資料が各地に散在しているので、それらを基にしてそれぞれの学会の発生の事情と研修・活動の経過や内容について明らかにすると共に、佐渡学会連合懇親会の果たした役割等についても述べてみたい。

1. 青年層の研修組織とその成立過程

近世においては、村落ごとに若者組とか若衆組と呼ばれる組織がつくられており、祭礼行事や自警団的活動など、村の生活と密接に関連した活動を行っていた。彼らは、一定の年齢になると独自の宿を持ち、昼は働き、夜になると宿(若衆宿)に集まって合宿生活を行った。このような集団生活の中で、若者たちは自らの村落への理解や自分自身への認識を深め、善悪の判断力を養い一人前の若者としての資質を身に付けて行った。

しかし、近代国家への仲間入りを急いでいた明治政府は、男女の風紀の乱れなどが外国人のキリスト教宣教師や教育者から厳しい批判を受けたこともあって、若衆組などの解散を勧告した。相川県でも、明治9年2月に文明の良民となるために風俗を正すよう18ヶ条からなる「自今可改ヶ条」を厳達した。その18条には、次のように記されている。

在中ニテ若イ衆仲間ト唱へ、年若ノ者党ヲ組ミ頭分等相立、神事祭礼ノ節動モスレハ他組ノ者ト喧嘩口論ヲ醸シ、甚シキニ至リテハ組内ノ処女ハ若イ衆仲間ノ支配杯ト唱へ、父母ノ指令ニモ難任セ悪習有之向モ相聞候条、自今右様ノ儀急度禁止候事

さらに、近代国家の建設と共に自給自足的な村落共同体が解体する中で、伝統的な若衆宿などの制度も衰えていった。

ところが、明治10年代に全国的に高揚する自由民権運動における政談演説会や、教育の普及などによって、社会的に目覚めた青年層が組織を再編し、民権運動が退潮期を迎える明治20年代の初めに学術の討論や知識の交換を目的とする自立的な組織・団体が各地に誕生し、全島的に広まったようである。これらが明治末期には青年会、大正期になると青年団となって行政指導のもとに再編成されることになる。その結成の契機や過程はさまざまであるが、大別すると、①近世の若衆組などの伝統的な青年集団が明治初期にいったん〇〇会と改称し、組織的に確立していくもの、②従来の若衆組が先に紹介した相川県の通達などにより消滅したあと、明治20年代に学習会や夜学会・同窓会・青年会などとして新たに組織されるもの、③従来の若衆組が改組されてそのまま青年会・青年団と改称されたものなどとなる。佐渡学会連合懇親会の場合はこれらを総称して「学会」と称しているが、そのなかでも②を結成の景気としているものが最も「学会」に近く、中心的な役割

を果たした。たとえば金沢村では、明治22年(1889)11月7日に尾花崎の山田楼に地方有志が集まったとき、小学校長の小林忠次が次のような発言をし、「金沢遷喬会」が結成されたと言う。

今日ノ時世ハ暫クモ悠々閑々ト安楽ニ日ヲ送ルノ時ニアラズ、然ルニ此地方ニ於テ学術ノ攻究スルノ会合アラザルヲ遺憾トス、一ノ演説討論ノ会ヲ興シ学術ヲ攻究シ旁ラ友情ヲ厚クスルトセバ如何

小林校長の発言によって衆議一決、金沢遷喬会が結成され、会長に植田五之八(35歳)、幹事に藤本亀蔵と伊藤円蔵(23歳)が推され、顧問格として近代農業の指導者である茅原鉄蔵(40歳)や民権家の石塚秀策(37)なども名前を連ねているが、会員19名のほとんどは20歳代の若者たちで構成されていた。このとき議定された規則の第1条には

「本会ノ目的ハ学術ヲ攻究シ、智識ヲ交換シ、友誼ヲ親密ナラシメルニ在リ」

と、その目的を明らかにしている。遷喬会の結成より10余日おくれた同年11月24日、平泉村にも「平泉同志研究会」が発足した。会長には当時教員だった北条欽(22歳)が、幹事には同村の助役高橋磯次郎(43歳)と北見喜宇作(22歳)が就任している。同会で特筆すべきことは、会員が交代で時宜に即した演説をしたり、意見交換を行った外に、北見喜宇作が月2回の例会のほとんどで「日本外史」や「孟子」の講義をしていることである。

つぎに、明治26年(1893)の養気会(二宮村)によって会員の構成をみると役場職員5名、教員6名、会社員1名、海軍水兵1名、医師3名、祠掌子弟3名、僧侶2名、農業者15名、工業者1名、商業者1名で合計38名とあり、地域によって差はあるものの、構成員のおよその想像がつく。なお、養気会の会長には、当初教師の矢田求(33歳)が就任し、中心になっ

て活動した齊藤長三は27歳)であった。

このように、結成にあたっては指導者として僧侶や神官、校長、村長などの地域の名望家がリードした地域もあったが、中心になって活動したのはあくまでも20歳代の青年たちであった。

2. 佐渡学会連合懇親会の結成とその役割

旧町村や村落ごとに結成された研修組織(学会)は、その会則をみると、①智識の交換、②徳義の修養、③学術の研究などを通して、地域社会の改良を図ることを目的とし、講義や演説

会・討論会・談話会・雑誌の発行・図書の購入と巡回、幻灯会など共通の目的や活動を行っている場合が多かった。そこで、それぞれが「孤立しては十分な成果をあげ得ず、連合して協力し合う事によってこそ目的を完全に達成できるし、これこそ文明の文明たる進歩的方策ではなかろうか」と二宮村養気会が呼びかけ、それに応じて、明治23年(1890)11月23日の「佐渡学会連合懇親会」に参集した。ここで、泉公民館に保存されている10回の資料をもとに、まず参会学会名とその実態を表1で見ることにする。

表1 佐渡学会連合懇親会に参会した学会名とその実態

学会名	町村名	会員数	創立	平均出席者	代表等	備考
相川致力会	相川町				味方友次郎	①
佐渡青年協会	同上	100			森 知幾	⑤⑥
佐渡青年学会	同上	118	明25. 4		山田 倬	⑤⑥⑦
養気会	二宮村	45	明20. 11	11	矢田 求	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩
同友(学)会	沢根町村	37	明23. 8	11	市島恵喜多	①②③④⑤⑥⑦⑧
行余青年会	河原田町	51	明22. 11	13	高橋専蔵	①②③④⑤⑥⑦⑧⑩
同志研究会	平泉村	48	明22. 11	22	北見喜字作	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩
遷喬会	金沢村	51	明22. 11	19	植田五之八	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩
金蘭会	夷町				佐野卯之助	①
畑野青年会	畑野村	39	明22. 4	15	本間慶四郎	⑤⑥⑦⑧
多田一致会	多田				山我嘉七	①②
羽茂青年会	徳和村				菊地多仲	②③④
千手少年会	千手村					②
同志講話会	亀ノ背村	32		15	藤井市蔵	③④⑤⑦
北里益友会	真光寺	41		22	北守左千代	③⑧⑨
国風会	羽茂村					③
先覚会	水津村	37	明24		伊藤亀蔵	③⑥
吉井学会	吉井村	35	明22. 7	10	田村恒寿	③④⑤⑦⑧⑩
新穂益友会	新穂村					③
青年義勇会	湊町	68	明24. 9	20	齊藤隆次	③⑤⑥⑦
文友会	二宮村					③

三餘学会	吉井村				柳島八十八	③④
真野青年協会	真野村	41			尾畑 実	④⑤
養智会	恋ヶ浦村				松井仙太郎	④⑧
同志共修会	小布施村	42			藤井豊丸	④⑤
時習会	同上				中川嘉伝	④
三餘学会	川茂村	74			高津嘉吉	④⑤⑧⑨
千手晩成会	千手村	28		15	伊達喜太郎	④⑤⑥⑦
以信益友会	窪田	15		8	本間新平	⑤
少年学会	小木町					⑤
野田青年会	野田村	20		10	大道千里	⑤
少年研智会	畑野村	30			本間定次	⑤
暇習会	金丸村				若林文平	⑤
維宝農談会	金沢村		明 17		茅原鉄蔵	⑥
夷益友会	夷町	50		20	山口松蔵	⑤⑥⑦
内浦同志会	内浦村	97	明 14. 9	16	佐竹守太郎	⑥
加茂歌代青年会	加茂歌代村	29	明 25. 7		岡村亀綱次	⑥
明治青年会	明治村				藤井応吉	⑥
内海府青年協会	内海府村				木村勘蔵	⑥
有隣会	加茂歌代村	25	明 25. 7	13	市橋長作	⑦⑧
佐渡水産会	相川町				森 千幾	⑦
内浦学会	内浦村				松本喜代丸	⑦
高千青年学会	高千村	33	明 27. 1	28	杉山熊太郎	⑧
羽南少年会	小木町	43		15	木村堅讓	⑧
甲午倶楽部	畑野村					⑧⑨
潟上洗心会	潟上村					⑨⑩
勇進会	浦川村	16	明 26. 7		佐竹守太郎	⑦

- 註 ① 学会名は参会時の会名を記した。したがって、同一学会で会名を変更したと思われるものもあるが、重複して載せてある。ただし、沢根町村の同友会のみは同友学会とも称しているので（ ）で学を入れた。
- ② 代表者はそのつど変わるので、会を代表して報告している人名の早いほうを記した。したがって会長とは一致しない。
- ③ 備考の①は第1回目に参会したことを示し、⑨は第1回の会主をつとめたことを表している。
- ④ 会員数、平均出席者数は一番多い数を、創立年月も早い方を載せた。

島内の主な学会は表1の通りであるが、最も活発に活動をして島内の他の学会をリードしたのは、毎回参会し、しかも会主も引き受けた二宮村の養気会や河原田町の行余青年会、平泉村の同志研究会、金沢村の遷喬会などであった。しかし、佐渡学会連合懇親会には参会しなかったために表には載らなかった組織や団体も多く結成されていたので参考までに記しておく。(表2)

表2 佐渡学会連合懇親会不参加の組織・団体

旧市町村名	学会名(主な地域)
旧両津市	有隣会(加茂歌代村)・夜学会(白瀬)・中興義会(中興)
旧相川町	耕学会(相川)・海郷青年協会(高千)
旧金井町	研智会(千種)・同志団(新保)・協同団(貝塚)
旧新穂村	佐渡青年協会・練習会(新穂)・日進学会(井内)
旧畑野町	興農会(栗野江)・小倉青年会・三宮青年会
旧真野町	余力学会(椿尾)
旧小木町	致力会
旧羽茂町	実力育成会(村山)

3. 佐渡学会連合懇親会の経緯と変遷

3.1 各回の概要

(1) 第1回(明治23年11月23日)

会主 養気会 二宮村石田会堂

8学会38名参会

①議長 矢田求

②主な協議内容と決定事項

- ・会の名称「佐渡学会連合懇親会」に決定し「規則」は継続協議、年2回開催は決定

※「規則」の目的「本会は国内教育の普及、文学の上進、及び言語の練磨、智識の交換を以て目的とす」(平泉村同志研究会建議)

- ・各会の会務の報告

③宴会・演説

(2) 第2回(明治24年5月3日)

会主 同友学会 沢根町村 専得寺

8学会53名参会

①議長 竹本多平

②主な協議内容と決定事項

- ・「規則」の協議、決定せず起草委員(矢田求外4名)選出
- ・各会の会務の報告

③宴会・演説

(3) 第3回(明治24年10月24日)

会主 遷喬会 金沢村中興 金沢活版所

18学会80名

①議長 小林忠次

②主な協議内容と決定事項

- ・「規約の起草案」が起草委員より提案され、「本会ハ本州各学会相互ノ親交ヲ保チ気脈ヲ通スルヲ以テ目的トス」に議決
- ・各会の会務の報告

③宴会・演説

(4) 第4回(明治25年4月23日)

会主 同志講話会

小布施村西三川 佐々木源十郎家

15学会38名

①議長 藤本亀蔵

②主な協議内容と決定事項

- ・養気会建議の「佐渡3郡ノ高等小学校区域」について協議したが、議題としないことに決した。
- ・各会の会務の報告

③宴会・演説

(5) 第5回(明治25年10月22日)

会主 行余青年会 河原田常念寺

22学会80名

①議長 浦本金次

②主な協議内容と決定事項

- ・養気会と同友学会との間で教育の進歩についての演説が政談演説に該当するかど

うかで対立、両会の意見を述べるのみで可否を問わないことに決す。

- ・各会の会務の報告
- ・養気会が機関紙「北斗」配布する（以後毎回）。

③宴会・演説

(6) 第6回（明治26年4月2日）

会主 青年義勇会 湊町妙法寺
16回39名

①議長 近藤義郎

②主な協議内容と決定事項

- ・「規約の改正案」について協議し、第1条を「佐渡学会連合会ハ本州各学会ノ締盟者ヲ以テ組織ス」と改正、他にも多少の改正案があり、協議する。
- ・佐渡水産会・農会なども学会へ入会を認める。
- ・学会連合懇親会の記録を調整することに決まる。

③宴会・演説

(7) 第7会（明治26年10月21日）

会主 佐渡青年学会 相川町中教院
16学会35名

①議長 味方友次郎

②主な協議内容と決定事項

- ・規約改正の協議をし、議決する。

③本会より宴会のあと、公開学術演説会（赤塚四郎「外国崇拜は我国の独立を失う」ほか7名）を開催する。

(8) 第8回（明治27年4月22日）

会主 同志研究会 平泉村本光寺
30学会54名

①議長 北条欽

②主な協議内容と決定事項

- ・会誌の発行について協議する。
- ・各会の会務の報告

③宴会のあと、公開演説会（木村堅義「日本の風教を論ず」ほか9名）を開催する。

(9) 第9回（明治27年10月21日）

会主 川茂三余学会 吉田屋
7学会37名

①議長 高津嘉吉

②主な協議内容と決定事項

- ・規約改正（多数決の是非について）の協議をし、委員を選んで決めることとなる。
- ・各会の会務の報告

③宴会のあと、公開学術演説会（茅原次六「農談」ほか7名）を開催する。

(10) 第10回（明治28年4月27日）

会主 吉井学会 吉井兒玉庄吉家
14学会27名

①議長 池裏一

②主な協議内容と決定事項

- ・規約改正（7条公開演説会の持ち方、時事問題の解釈等）及び無断欠席の扱い等について協議する。
- ・各会の会務の報告

③宴会のあとの公開学術演説会は中止となった。

3.2 学会連合懇親会の経過と変遷

3.2.1 名称と目的

本会は、その成立当時から幾つかの課題をかかえていた。その第1は会の名称で、当初「学会連合佐渡協会」とすることで提案された。しかし、交流を中心にしようという意見が強く懇親会となった。第2もこれに関るが、平泉村同志研究会から建議として出された規則の目的（第1回参照）も決定には至らなかった。そして第2回に従来の案は破棄されて起草委員が選ばれた。

かくして第3回は、目的については起草委員の規約案（第3回参照）が議決され、第9条に「時宜ニ依リ公開演説及討論ヲ開クモノトス」を加えた。これによって、本会は協議・討論の場というより交流・親睦の場という性格のつよいも

のとなったのである。

ところが、日清戦争が勃発する明治27年(1894)前後から行政主導の青年会や青年団が各行政区ごとに編成されるようになると、そこに組み込まれていくことになり、後でも述べるように各学会の主体的な活動は次第に少なくなって行った。目的を見ても、明治26年4月の規約では、「世論ニヨリ団結ノ勢力ヲ以テ社会ノ改良進歩ヲ促スヲ目的トス」とあり、さらに、明治28年4月の規約では、会の名称が「佐渡学会連合会」となり目的も「各学会ノ親交ヲ保チ併テ風俗ノ矯正ヲ謀ルモノトス」となり、日本青年団協議会の綱領と共通性が図られることになった。

3.2.2 活動内容

活動内容の面からみても、当初は各学会の自主性に任されており、独自性があったが、次第に行政への協力や戦意の向上が主なものになって行った。たとえば、第6回頃までは協議が中心で、その後の懇親会の中で公開演説会が行われていたが、第7回以降は、懇親会が終わった後、会場を変えて公開学術演説会を開催した。この時には、中教院へ会場を移し、8名の弁士が登壇し、傍聴者が会場にあふれ、閉会したのは午後11時40分だったと言う。

さらに日清戦争勃発後の第9回(明治27年10月21日)、第10回(同28年4月28日)には、日清戦争の戦意高揚に関する事業を必ず行っている。例えば、「日清事件ニ付演説会ヲ開ク事3回」(吉井学会)・「兵士ノ為メニ送別会ヲ開キ新潟新聞ニ托シテ遠征兵士ニ慰勞義金ヲ送付セリ(甲午倶楽部)などである。

4. 主な青年団体(学会)の活動事例

佐渡学会連合懇親会の記録は第10回で終わっている。明治29年1月付の「同志研究会第9回報告書」によると、明治28年9月23日付で第11回連合会の案内状を発送しているが、出席通知のあった学会は日進学会(新穂井

内)・行余青年学会・遷喬会・吉井学会と会主の同志研究会の5学会で、規約第10条(成立は学会の過半数の出席が条件)に満たないため休会することとなり、以後開催された様子はない。第10回連合会の議事で無断欠席が多いことが問題になっていることからすると、連合懇親会として集まったのは第10回が最後であったと考えられる。ただし、各学会はその後も独自の活動を続けながら、次第に行政主導の青年団・青年会へと組み込まれていくことになる。しかし、先にも述べたように自主的に組織された各青年団体(学会)は独自性の強い活動を目的に組織され、実際に活動をし、その構成メンバーが行政主導に組織化された後でも、それぞれの地域の文化や産業の振興に大きな役割を果たしている。ここに、そのいくつかを紹介しておく。

4.1 養気会

二宮村石田を中心に結成された「養気会」は、「有志者相集合シ交誼親睦ヲ謀リ智識ヲ交換シ実力ヲ養ヒ陋習弊風ヲ洗滌スル」ことを目的に、佐渡では最も早い明治20年11月に結成された。また、佐渡学会連合会結成を呼びかけ、成功させたことは既に述べた通りである。活動内容は他の学会と同じように講義、学術演説会、討議、談話などであるが、本会独自の特色ある活動として『養気会誌』と称する雑誌(月刊)の発行がある。この会誌は、1号から11号までは筆記して会員間で回覧し、明治23年12月の12号から22号までは印刷して会員を中心に頒布している。そのために、会則の第5条で会員は毎月会費として3銭、入会時に会誌印刷費として5銭を次会に納めることとしている。内容は「養気会誌第15号目次」(図1)でも明らかなように、本会の記事の外、論説・考證・雑録・史談・文苑などからなり、徳義の修養から宗教論、歴史的論文、佐渡人論、文苑など多岐にわたっている。さらに養気会では、明治24年から内容を文学と歴史の学術に関するものに限り、内務大臣の認可を得て会員以外

本 會 記 事	●養氣會誌第十五號目次
道徳の定義	矢田 求
曲水の宴	石塚 伊作
果シテ釋迦ノ意ナラン	名畑 喜十郎
佐野人心草履ノ原因	味方 友次郎
佐渡國造大荒木直の祖先考	矢田 求
佐渡國勢一斑	野田 長三
俗語考	矢田 求
○鈴木真年氏の消息	一日ノ食量
○古へ食事ハ一日ニ度ナリトシ	露 露 長三
○日野藤中斷言書讀解罪状事	
歌八首	詩 三首
文 史 雜 考 論	
告 苑 談 錄 證 說	

図1 養氣會誌第15号目次

にも広く頒布することとした。そのため、会則の一部を改め、会の付属として「北斗館」を置き、誌名も『北斗』とした。

ところが、明治26年10月に発行した第25号に学術以外、すなわち社会の時事・政治等に関する記事が掲載されているとして発行禁止となり、明治26年11月発行の第27号（廃刊号）を以って廃刊されることになった。対象となった記事は明確にはされていないが、「北斗欄」の教育の普及を望むことを趣旨に述べた「高力郡長に望む」と、「論説欄」の「今日ノ地方官吏ハ立憲的制度ニ適応セズ」、「雑報欄」の相川町政の紊乱を批判した記事等が問題になったものと思われるが、文学と歴史に限るとしながらも、第30号には、①北斗ハ改良進歩ヲ以テ目的トス、②北斗ハ行政及ヒ執行ノ権利ヲ侵害セサル以上ハ諸般ノ事項ヲ論究スルヲ以テ目的トス、③改良進歩ヲ図ルハ社会ノ任務ナリ、④学会ハ改良進歩ヲ図ルノ社会タル事ヲ是認ス、故ニ⑤北斗ハ学会ノ機関タル事ヲ自認シ公明正大ニ論議スルヲ以テ本領トス、と記した「北斗之本領」が掲げられており、ここにも、自由民権運動の影響が脈々と流れていたことがうかがわれる。

4.2 平泉同志会

平泉同志会も独自の活動をした学会のひとつで、「徳義ヲ重ンジ智識ヲ交換スル」ことを目的に明治22年に11月に結成された。第7回

の懇親会の記録によると、各学会共通の活動内容の外に、平泉同志会付属図書縦覧所及び古書保存部の設立、村誌編纂のための資料収集、史跡の整備等の活動を続けた。特に史跡の保存整備では、明治28年7月10日に開かれた第112回同志研究会で黒木御所蹟等へ石標を建設することにし、台石とする黒曜石を山中より掘り出すことが議決されている。揮毫は萩野由之博士（当時学習院教授）に依頼したとあり、明治32年頃に黒木御所蹟・御腰掛石・龍燈松の3ヶ所に石標を建てている。また、この会の代表であり、毎回「日本外史」や「孟子」の講義をしたという北見喜字作は同志会の仲間と金沢遷喬会の初代会長に推された植田五之八らと共に、明治39年には佐渡で最初の耕地整理組合を組織し、翌40年事業に成功している。

おわりに

このほかの学会でも、「吉井学会」の代表池襄一は、村長に就任すると夜学会で育てた野島新一郎（佐渡市吉井本郷）や甲斐紋平（佐渡市潟端）らの青年がため池を掘って丘陵地の開墾を計画すると大いにそれを励まし、安養寺のため池による加茂湖畔にまで及ぶ灌漑面積73.5ヘクタールの広大な開田を成功させている。このような個々の学会の活動については、今後さらに明らかにしていく必要があると考えている。

参考文献

- ①『金沢村誌稿本』 昭和9年
- ②平山和彦『合本 青年集団史研究序説』新泉社 1988
- ③『金井町史』近代篇 昭和42年
- ④『金井を創った百人』平成12年
- ⑤「佐渡学会連合懇親会記録」（明治23年～明治26年） 泉公民館所蔵
- ⑥『養氣會誌』・『北斗』
- ⑦『同志研究会第9回報告書』明治29年